アクティブラーニング型授業の実践と課題

――『伊勢物語』の場合――

小川満江

1　はじめに――アクティブラーニングについて

近年、高等学校教育においてもアクティブラーニングが注目されている。広島県では、平成二十七年三月、教育委員会教育長の下崎邦明氏より「広島県における『学びの変革』に向けたチャレンジについて」と題された資料が提示された。そこでは「広島県が目指す『学びの変革』」とは「『主体的な学び』への転換」であり、「主体的な学びとは？」「受動的な学び→能動的な学び」「教師基点の学び→学習者基点の学び」「浅い学び→深い学び」と整理されている。

主体的な学び、能動的な学びへの転換は、もともと大学教育に向けて唱えられたものであった。平成二十四年八月二十八日に出された中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」「4．求められる学士課程教育の質的転換」に「生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生からみて受動的な教育の場では育成することができない。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見出していく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である。すなわち個々の学生の認知的、倫理的、社会的能力を引き出し、それを鍛えるディスカッションやディベートといった双方向の講義、演習、実験、実習や実技等を中心とした授業への転換によって、学生の主体的な学修を促す質の高い学士課程教育を進めることが求められる。」とあり、大学教育における能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換の必要性が明示されている。続いて「学生には事前準備・授業受講・事後展開を通して主体的な学修に要する総学修時間の確保が不可欠である。一方、教育を担当する教員の側には、学生の主体的な学修の確立のために、教員と学生あるいは学生同士のコミュニケーションを取り入れた授業方法の工夫、十分な授業の準備、学生の学修へのきめの細かい支援などが求められる。」「双方向の授業を進め、十分な準備をしてきた学生の力を伸ばすには、教員が当該分野及び関連諸分野の学術研究の動向に精通している必要があり、そのため

には教員が自らの研究力を高める努力を怠らないことが大切である。」とあり、アクティブラーニングは学生にとっても教員にとっても、時間をかけて、準備し、工夫し、研究しなければ成立しない重さを持つものであることが示されている。

また、本答申の「8．今後の具体的な改革法策②本審議会において速やかに審議を開始する事項」には「高等学校において知識・技能の確実な習得とともに、言語活動、探求活動や社会体験活動等を通して批判的・合理的な思考力や学習意欲、倫理的・社会的能力、チームで行動できる力を育成し、大学において専門分野の学修を通じこれらの汎用能力を更に伸ばす」とあるが、高等学校におけるアクティブラーニングのあり方について考えさせられる。

溝上慎一氏はアクティブラーニングを「一方向的な知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味でのあらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う。」（『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』P7）と定義している。定義で「認知プロセスの外化を伴う」とあえて加えている点については「アクティブラーニングには、社会の変化への対応として、認知機能の育成、すなわち技能・態度（能力）の育成という課題も込められている」（同書P10）と説明がある。また「認知プロセス」については「認知心理学の枠組みを参考にして、知覚・記憶・言語、思考（論理的／批判的／創造的思考／、推論、判断、意思決定、問題解決など）といった心的表象としての情報プロセスを指す」（同書P10）と説明されている。

松下佳代氏は「大学での学習は単にアクティブだけではなく、ディープであるべきだ」（松下佳代編著『ディープ・アクティブラーニング』P1）と述べ、ディープ・アクティブラーニングを提唱する。そしてディープ・アクティブラーニングを「学生が他者と関わりながら、対象世界を深く学び、これまでの知識や経験と結びつけると同時にこれからの人生につなげていけるような学習」（同書P23）と定義し、「ディープ・アクティブラーニングでは学習の『深さ』に目を向けるが、『深さ』の系譜として、少なくとも『深い学習』『深い理解』『深い関与』をあげることができる。アクティブラーニングにおける能動性を〈内的活動における能動性〉と〈外的活動における能動性〉の2次元で捉えれば、ディープ・アクティブラーニングとは、外的活動における能動性だけでなく内的活動における能動性も重視した学習ということができる」（P24）とまとめている。

いずれにしてもアクティブラーニングがめざすことは、「汎用的能力の育成」「認知機能の育成」であり、深い学びによる「これからの人生につなげていける」力、「社会の変化への対応」ができる力の育成である。

溝上氏はフィンクの提示する「意義ある学習経験」の要素を「・基礎的知識（鍵となる概念、用語、関係などについて理解と記憶）・応用（学習内容を利用・適用する方法について知る）・統合（主題を他の主題と関連づけることができる）・人間の次元（主題を学習することで、個人的・社会的示唆を得る）・関心を向ける（主題に関して関心を持つ。そして、さらに学ぼうとする）・学び方を学ぶ（授業が終わった後も、主題について学び続ける方法を知る）」（同書P19）

と紹介していた。実際に授業を構想する上で示唆に富んだ内容である。

高等学校では多くの履修科目があり、「知識・技能の確実な習得」でさえ多くの生徒にとって容易なことではない。高等学校国語科において、知識・技能の確実な習得とともに、汎用的能力を育成するためのアクティブラーニングをどのように取り入れたらよいのか、考えてみたい。

筆者はかってアクティブラーニング論を知らないころ、大村はま氏の単元学習から学んだことを少しでも生かそうとして、高等学校の現代文や古典の授業で、生徒の主体性を促す授業を計画し、実践したことがある。本稿では、『伊勢物語』の授業実践を報告、分析し、アクティブラーニングのあり方や効果、課題について考えていきたい。

2　単元設定の理由・教材観

広島県立府中高校三年生を対象に、平成二十年四月、古典学習への不安を聞いたとき、和歌の解釈をあげた者が圧倒的に多かった。和歌の解釈は、一語一語を正確に押さえつつ、背景、修辞法を考慮し、少ない字数の中に含まれる豊かな世界を読み取らなければいけないので、高校生にとって難しいことである。そこで、授業で、できるだけ多くの和歌を扱い、和歌に親しませることで、苦手意識を少しでもぬぐうことはできないかと考えた。そして授業者の説明中心の授業でなく、生徒自らが調べたことを発表し、質問を出し合う中で、和歌への理解を深める方法はないかと考え、『伊勢物語』を教材とする単元計画を練った。

『伊勢物語』を教材とした理由は、①一年次に学習した歌物語であること、②登場人物の行動や心情を描写し、歌をクライマックスとする形式がとられていること、③男女の愛はもちろんのこと、主従、親子、兄弟、友との愛なども描かれている愛の物語で生徒が親しみやすい作品であること、④『伊勢物語』を読むことで、物語文学の原型を確かめ、「みやび」や「まこと」の心の源流に触れることができること、である。

三年生は、二学期の前半で教科書教材を終え、後半は、入試問題演習の授業を展開している。演習の授業と並行して、和歌の解釈を中心とする『伊勢物語』の授業を展開する方法として考えついたのが帯単元である。

帯単元は、平成十八年度に「この語に注目」（一単語を取りあげ、語源、意味、用例などを発表させるもの）として、平成十九年度に「『伊勢物語』を読む」（各段から一語を取りあげて説明させたり、和歌のポイントを説明させるもの）として、実施している。「この語に注目」は、クラス全員に対して実施することができたが、「『伊勢物語』を読む」は計画の不備で、七回程度しか実施できなかった。そこで平成二十年度は計画したことがやりきれるように単元計画を綿密に立て、準備して実施した。

その後、同じ単元を平成二十四年度広島県立尾道北高校二年生授業担当クラスを対象に実施した。単元設定の理由として、高校二年次に一つの古典作品の中からある程度まとまった教材を扱いたかったこと、各段の学習にもっと時間をかけるために、帯単元でない計画で実施したかったことの二点が加わる。

3　単元実施にあたって

（1）教材の選定

『伊勢物語』から二十四段分の教材を選定した。選定にあたっては、まず『伊勢物語』に関する書物を参考にしながら、生徒が興味を持ちそうな段であること、展開がわかりやすいものであること、さまざまな愛が描かれているものであることなどを考慮した。

（2）学習の手引き〔資料1〕とワークシート

手引きには学習目標、ワークシートを作成する上での留意事項、発表や聴くことにおける留意事項を示している、留意事項は学習目標に沿っている。本文の展開については、場面・景・事物、登場人物の状況・行動・心情を整理すること、和歌については景・事物と心情のかかわり、修辞法を押さえて解釈することを要とした。発表については、時間や説明の仕方を提示している。

4　帯単元での実践

（1）対象生徒

広島県立府中高校三年四、五、六組（文系発展講座）
二十四名（男子五名・女子十九名）

（2）指導観

二十四名の生徒一人一人に別々の教材を与え、発表形式の単元を実施しようと考えた。生徒たちは、素直で授業に前向きであり、与

〔資料1〕

『伊勢物語を読む』　学習の手引き　　三年（　）組（　）番（　　）

★学習目標
①登場人物の行動や心情に着目して、本文の内容を把握する。
②本文の展開と和歌の内容とのつながりを理解する。
③景・事物・心情に留意して、和歌を解釈する。
④発表者の読み取りを共有して内容理解を深める。

★ワークシート作成に当たって　―　次の点に留意してまとめよう。

1　本文の展開
・登場人物は誰か。
・誰がどんな立場であるのか、どんな状況におかれているのか。
・誰がどんな様子であるのか。
・誰がどうしているのか。
・誰がどう思っているのか。
・どんな場面であるのか。
・どんな景・事物が描写されているか。
（これらの事項をわかりやすく整理する。図式的に整理してよい。）

2　和歌について
・どんな景・事物が描写されているか。
・中心的な心情は何か。
・景・事物と、人物・心情がどうかかわるか。（景・事物は人物・心情の比喩であることが多い。）
・どんな修辞法が用いられているか。
（枕詞・序詞・掛詞・縁語・比喩など。これらの修辞で景・事物が表現されることが多い。
○序詞は行動・心情を導く。○掛詞は景・事物と行動・心情が掛けられている。二つの文脈に注意する。）
・解釈　←　読み取った和歌の内容を、つなぎの言葉を工夫しながらまとめる。
・返歌は、前の歌との対応を考える。
・引歌（古歌）は、和歌の趣旨を押さえる。

3　感想・本文と和歌との関連
・感じたこと、味わったこと。
・本文の展開と和歌とのつながりのポイント。（1・2で整理したことのポイント）
〔この二点については、両方まとめても、片方だけまとめてもよい。〕

★発表に際して
1　担当の段をまず音読する。意味のまとまりを意識して音読する。（区切り方に留意）
2　発表時間は七分程度である。
3　わかりやすく、ポイントを押さえて聴き手によく伝わるよう発表する。
・資料をそのまま読むのではない。　・一文を短くして語る。
・資料を見てよいが聴き手の方にも顔を向ける。　・三メートル向こうにいる人に声が届くようにする。

★聴くことについて
1　発表を聴きながら、内容理解に努め、よくわからないところがあったら、質問する。

えられた課題にはきちんと取り組む。本単元で、生徒それぞれが考え、整理したことを発表させるとともに、聴く者にも発表内容を共有させることで、学習への主体的態度を養い、古典学習における基礎の定着と学習の広がりや深化を図ろうと考えた。

(3) 単元の目標

①登場人物の行動や心情に着目して、本文の内容を把握する。
②景・事物・心情等に留意して、和歌を解釈する。
③歌物語における和歌のあり方を理解する。
④まとめたことをわかりやすく聴き手によく伝わるよう説明する。
⑤発表者の読み取りを共有して内容理解を深める。

(4) 単元の評価規準

ア　関心意欲・態度
①主体的に読解し、作品世界を味わおうとする。
②物語文学における和歌に関心を持つ。
イ　話す・聞く能力
①整理したことを、ポイントを押さえてわかりやすく説明することができる。
②発表を集中して聴き、よくわからない点は質問することができる。
ウ　書く能力
①発表資料を、わかりやすく工夫して作成することができる。
②和歌の解釈を的確に行うことができる。
エ　読む能力
①場面や登場人物の行動を読み取ることができる。
②本文の展開と和歌との関連を理解することできる。
③景や事物、心情に留意して和歌の内容を理解することできる。
オ　知識・理解
①難語句の意味を調べ、理解することできる。
②和歌の修辞を理解することができる。

(5) 単元の展開

第一時○教材集を配布する。（教材集は選択した二十四段の本文と注釈の入ったものである。『日本古典文学全集』による。）
(25分)　○授業の進め方について説明する。○担当の段を決定する。
第二時○学習のねらいを確認する。
○「学習の手引き」に沿って、発表資料の作り方や、発表の方法について説明する。
○担当の段について、それぞれ発表資料（ワークシート）を作成させる。（発表資料作成時は、四人ずつのグループを作り、よくわからないところがあったら相談させた。）
第三時○一段、二段、四段、五段について、担当者に発表させる。
○発表後は質疑応答させる。
○和歌を中心にして一段、二段、三段、五段の内容を把握させる。

※第一時を実施したのが平成二十年十月三十一日である。第三時は平成二十年十一月七日（金）5限目（13：30～14：20）に公開研究授業として実施した。広島県教育研究会国語部会の事業の一環である。この第三時以降は帯単元的に『伊勢物語』を扱った。各時間のはじめに、一段につき、十分程度とって発表、質疑をさせた。そのようなかたちで十四時間分の授業のはじめを使い、最終

段（百二十三段）を扱ったのは一月九日の授業であった。各時とも残りの時間は問題演習の授業を展開している。

(6) 第三時の展開

〈 目標 〉

①まとめたことをわかりやすく聴き手によく伝わるよう説明する。

②発表者の説明や質疑を通して、場面・登場人物の行動・心情を理解する。

③発表者の説明や質疑を通して、文と和歌とのつながり、和歌の内容を理解する。

〈 展開 〉

a　学習活動

①・一段について、まとめたことを担当者が発表する。・質疑応答。

②・二段について、まとめたことを担当者が発表する。・質疑応答。

③・四段について、まとめたことを担当者が発表する。・質疑応答。

④・五段について、まとめたことを担当者が発表する。・質疑応答。

b　指導上の留意点

○発表、質疑後、内容把握に関して不十分なところあれば説明を加える。

○必要であれば、本文と和歌との関連や和歌における心情についてのポイントを押さえる。

○一段については初段としての役割に触れる。

○一年次、学習した「芥川」を思い起こさせ、四段、五段との関連を押さえる。

c　評価規準

○ワークシートを、ポイントを押さえてわかりやすく作成することができる。

○まとめたことを、わかりやすく説明することができる。

○和歌を中心にした本文の内容を理解することができる。

d　評価方法

○発表　○ワークシート　○行動観察

(7) 生徒の反応・態度

①　発表資料（ワークシート）の作成

ワークシート作成に使った授業時間は一時間のみであった。生徒はそれぞれ担当の段について黙読し、構想を練ったり下書きをしたりと意欲的に取り組んでいた。グループ内で互いにわからないところなど聞きあっていた。ワークシートの完成は課題としたが、それぞれ意欲的で工夫を凝らした発表資料を作成している。〔資料2〕

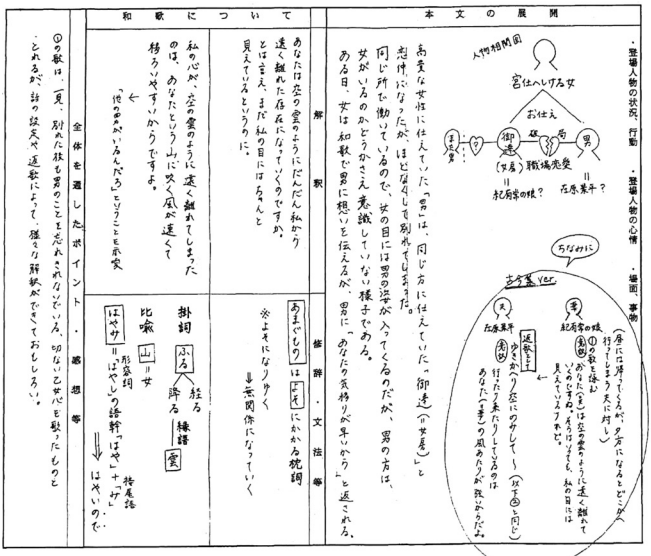
②　発表の態度

声の大きさ、テンポ、説明の仕方など、ほとんどの生徒が適切であった。発表の方法については第二時に説明しただけでその後指導はしていないが、三年生でしかも力量のある生徒たちであり、堂々とした発表を行った。

③　質疑

普段から生徒同士のコミュニケーションもうまくいっており、温かい雰囲気を持つ授業クラスであったので、質疑は活発であり、生徒はやりとりを楽しんでいた。お互いに学びあおうとする姿勢も強く感じられた。ただ積極的に質問する生徒とそうでない生徒との差はあった。自ら質問をしない生徒には、授業者が促し、一回以上は

〔資料2〕



『伊勢物語』　ワークシート　　三年（　）組（　）番（　　）

十九　天雲のよそ

むかし、男、宮仕へしける女の方に、御達なりける人をあひしりたりける。ほどもなく離れにけり。同じ所なれば、女の目には見ゆるものから、男は、あるものかとも思ひたらず。女、

①あまぐものよそにも人のなりゆくかさすがに目には見ゆるものから

とよめりければ、男、返し、

②あまぐものよそにのみしてふることはわがゐる山の風はやみなり

とよめりけるほ、また男ある人となむいひける。

・登場人物の状況、行動　・登場人物の心情　・場面、事物

人物相関図

宮仕へしける女

お仕え

恋

男

御達（女房）＝職場先輩

＝紀房雫の妹？　在原業平？

まだ女

ちなみに

古今集ver

（序には載ってるが、夕方になるとどこかへ行ってしまう夫に対し）

男　紀房雫の妹

②の歌は詠む

（男）あなたの心は空の雲のように遠く離れて見えているようにも、私の目には

女　在原業平

返歌とセット

（女）少々おへり（反にのケして～（女を）同じ）

男　行だ（男）の風あたりが強いからだ。

あなた（男）は空たりしてるのは

本文の展開

高貴な女性に仕えていた「男」は、同じ方に仕えていた「御達」（＝女房）と恋仲になったが、ほどなくして別れてしまった。

同じ所で働いているのだが、女の目には男の心が入ってくるのだが、男の方は、女がいるのかどうかさえ意識していない様子である。

ある日、女は和歌で男に想いを伝えるが、男に「あなたの気移りが早いから」と返される。

解釈・文法等

あなたは空の雲のようにだんだん私から遠く離れた存在になってしまうのですか。

とは言え、まだ私の目には、あなたが見えているようにも。

あまぐもの　は　よそ　にかかる枕詞

※よそになりゆく

⇒無関係になっていく

和歌について

私の心が、空の雲のように遠く離れてしまったのは、あなたという山に吹く風が遠くて移ろいやすいからです。

←「他の男がいるんだろ」ということを示唆

全体を通したポイント・感想等

掛詞　ふる　経る　降る　練語　雲

比喩　山＝女

はやサ　形容詞　はやし　の語幹「はや」＋「サ」　接尾語

⇒はやいので

①の歌は、夏、別れた後も男のことを忘れられないでいる、切ない乙女心を歌ったものと、これるが、詩の段落や返歌によって、様々な解釈ができておもしろい。

質問させるようにした。全体の展開の中で全く質問をしなかった生徒は一人もいなかった。

(8) 単元終了後の生徒の感想と分析

二十四名の発表を終えて、①担当・発表を通して、②発表を聴いて、③質疑を通して、④その他について、感想を書かせた。①から④については、全部埋めなくても書ける項目について書くよう指示した。次は生徒の感想の内容とその分析である。

①担当・発表を通して

ア　担当した段について詳しく知っていく中で、和歌が重要な役割をしているということがわかった。発表するとき、うまく説明するのは難しいと思った。

イ　みんなにわかってもらえるようにまとめるのが難しかった。歌で伝えたかった真意を読み取るのが難しかった。

ウ　こういう機会はあまり多くないので緊張した。和歌の訳とかが難しかった。センターとかで自分の担当したところが出たら満点とれる気がします。

エ　担当した段は短いものだったため、文章の内容と和歌を結びつけるというのが難しかったです。それだけに和歌の解釈では文章全体を踏まえることの大切さを実感しました。

オ　一つの和歌をこんなに詳しく調べることはやったことがなかったので今回はいい機会になった。調べていくうちに和歌の背景にあったものが次々とわかって、それを想像しながら読むととてもおもしろかった。

カ　やはり和歌は難しいと思った。
キ　担当した章を調べることで和歌が当時の暮らしに大きく影響することがわかった。和歌が上手であれば愛され幸せにもなれ、和歌こそが当時の人々の生活や人生の中心だったのだなと感じた。
ク　古文の中でも和歌は読み取りにくくて苦手意識が強かったけど、自分の担当の段をじっくり読んで調べたことで深く理解できたと思う。
ケ　歌は苦手なので避けがちだったけど、この機会を通してじっくり考えることができた。
コ　和歌の解釈が難しかったけど、図書館で調べて、どう解釈するのか理解できた。和歌を詠むとき、題についてののみだけでなく、別の意味も含ませて詠んでいたりしたので、昔の人の表現力の豊かさはすごいと思いました。
サ　自分で調べて発表することによって、一段ではあるけど、よく理解できた。また暇ができたら別の話も調べてみたいとう。
シ　私は自分が発表するずいぶん前から仕上げていて何度も見直しをして、「何を質問されても大丈夫」と思っていたけど、思わぬ質問にかなり焦った。そこで、「いろんな見方があるんだなあ」と思った。
ス　私は研究授業のときに発表させてもらったので、多くの人の前で話せて、とてもいい経験になりました。
セ　おもしろかった。
ソ　かなり緊張して疲れた。

タ　自分が担当した歌は、一度授業で扱ったものだったから、とてもやりやすかった。授業でやったときに疑問に思っていたところも理解できたのでよかった。
チ　私は「鶉」を担当し、何か以前読んだことがあったと思ったのですが、以前より内容的にも心情的にも深く学ぶことができたと思います。いつもは「先生に教えてもらって終わり」という感じだったけど、自分の解釈を人にわかりやすいようにまとめるという作業を行うことによってますますやる気がおきたように思います。
ツ　先生方がたくさん見ている中での発表は少し緊張したが笑いもあって楽しむことができた。私にとってはとても満足できる発表だった。
テ　難しい内容の文だったので、かなり手こずった。当時の人の考え方や様子を知るにはいい機会だったと思う。

②発表を聴いて
ア　本文の展開を図で表したり、歌を詠んだときの作者の気持ちを例を使って説明したりとそれぞれ工夫していて聴いていてとてもわかりやすかった。
イ　〝みんなすごい！〟この一言に本当に尽きる。絵とかもあってわかりやすかったし、質問にもちゃんと答えられていて発想力にも感心！
ウ　どの発表もとても詳しく調べていてとてもわかりやすかった。
エ　それぞれ、図や絵を描いてわかりやすいプリントを作ってい

たのでとてもよかったと思います。
オ　恋の話が多くて、今の若者の感覚とは違う昔の人々の行動や言葉に驚いたり感心したりした。みんなまとめ方が上手なので聴いていてわかりやすかったし楽しかった。
カ　みんな分かりやすくまとめていたし、自分なりの考えを持っている人もいていい勉強になった。
キ　人によって分かりやすい、分かりにくいがあって、自分もこうすればよかったなあとかまとめかたを他の方法でもよかったなあと思った。
ク　みんながすごく深いところまで調べていたので少し焦った。もっと細かいところまで調べればよかった。
ケ　発表する人の最初の音読でできるだけ内容理解しようとしましたが、なかなか難しいものでした。ただ内容理解だけをするというのではなく、入試でこの文章が出題されたと思って読むように心がけました。
コ　いろんな和歌があっておもしろかった。
サ　勉強になった。
シ　有名な歌からそうでないものまでさまざまでおもしろかった。歌を詠む状況がいろいろあって興味を持った。
ス　自分が知らない内容の話も、少し知っている話もみんなの発表内容によって理解できるようになりました。自分で一度こんな風な内容かな?と予想した後で発表を聴いて、人それぞれの解釈があるとかどちらにもとれるような表現があって面白いなあと思いました。
セ　どの和歌も作者の思いが込められており、よく伝わってきた。和歌は作るのも大変だろうけど、解釈するのも難しいので、送った相手に暗に含んだ意図を理解してもらえなかったらどうなのだろうかと疑問に思った。
ソ　それぞれの和歌が詠まれた状況、人物の心情など、現代に通じるものが多く、共感できる部分がたくさんあった。
タ　いろんな話を聞いたけど、どの話の中でも登場人物が気持ちを表現したり、誰かに伝えようとする時に和歌を詠んでいて昔の人にとって、和歌は大切な表現方法だったのだなあと実感しました。
チ　古典常識もいろいろあって、おもしろいと思いました。
ツ　『伊勢物語』の中には、いろんな種類の話があっておもしろかった。

③質疑を通して

ア　和歌は、掛詞など意味が深いなと思ったけど、少しずつ内容から和歌は読み取れるということが分かった。
イ　細かく調べていたので質問する部分を探すのが大変だった。
ウ　みんなよく調べていたので、答えられていてすごいと思った。
エ　我ながら、なかなかいい質問ができた気が…。
オ　気のきいた質問があまりできなかったのが残念です。
カ　自分では全て理解したつもりでも他の人の質問によって自分が疑問に思わなかったことが明らかになり、より一層理解が深まったと思います。

キ　その後が気になる終わり方をしている物語がいくつかあってみんなの想像の仕方がおもしろかった。
ク　解釈の仕方で疑問に思ったところを、分かるまできくことができたので、理解が深まった。
ケ　楽しかった。
コ　他の人はなかなか鋭いところをついているなあと思った。
サ　私も何回か当たって質問をしたけど、みんなきちんと調べていて解りやすく答えてくれ理解が深まった。自分の反省点は、積極的に挙手して質問することができればよかったのに出来なかったことです。
シ　難しい質問をされても臨機応変に答えていてすごいと思った。質疑を通して考えも一層深めることができた。
ス　自分でも気が付かなかった疑問などが多く、勉強になった質問も思いもよらないものがたくさんあり、より物語の世界が広がったように思う。
セ　修辞法や単語などの覚えきれていなかったところを再確認できた。また、本文には記述がない部分も、質疑を通して想像をふくらませることができた。
タ　もっと積極的に質問ができていたらよかったけど、普段から何に対しても疑問を持つくせがないので、考えるのが難しかった。
チ　昔と今では違う常識みたいなものがあって、理解しにくいこともあったけど、質疑を通して解釈できたりしたのでよかったです。

④その他
ア　今後も機会があったら、自分で読んでみたいと思った。
イ　この時間もほんとにスキでした。楽しくできて、他のクラスにはないものだったのでこのクラスでよかった。
ウ　これにとどまらず、二次まで和歌の克服に努めて、他の受験生に差をつけたい。
エ　この機会を通して前より和歌に興味を持つことができた。毎回みんなの発表を聴くのが楽しみだった。
オ　和歌だけを集中的に学習する機会がなかったので、とてもよい機会になったと思う。
カ　最初はとても大変そうで嫌だと思っていましたが、調べているうちに、また発表を聴いているうちに興味を持つようになりました。受験が終わったらもっと伊勢物語を調べてみたいです。素敵な機会を下さりありがとうございました。
キ　普通に授業しているだけではふれることのないたくさんの作品と出会えてよかった。
ク　歌は難しいと思った。

〈　感想の分析　〉
○　各段について調べ、まとめ、発表するという活動への関与に積極的だったことがうかがえる。
○　和歌の解釈に難しさを感じていたものの、調べて、説明するという活動を通して、背景や役割なども含めて和歌に対する理解が

深まったという感想を述べている。「和歌理解についての認知プロセスの外化」と言えるだろうか。

○　担当した以外の段も調べたいという意欲を示している感想もあった。「汎用的能力育成」につながるものである。

○　他者の発表資料のわかりやすさや発表の仕方のうまさに感心し、和歌の理解を深めたり、「伊勢物語」学習を楽しんだりしている。また、質疑や話し合いなどの、他者とのコミュニケーションにより学びを深めることができている。

(9)　課題

帯単元形態で時間を限っての学習を展開したが、話し合いやまとめの時間を十分とればよかったと思われる場面があった。教材の内容から考えるともっと広げたり深めたりすることが必要であった段もある。授業を通して理解が深まったという感想が多くあったが、生徒のこれまでと比べての深まりであり、和歌の世界や『伊勢物語』の世界そのものの深さや広がりに及んでいるとは言えない。

発表は全員が行い、質問については各生徒が少なくとも一度は行ったが、生徒同士のやりとりでは、積極的に発言する者とそうでない者との差はあった。

5　三単位のうち一単位を使った実践

(1)　対象生徒と教材

○尾道北高校二年文系（一、二、三組）C講座（発展講座）

二十二名（男子七名・女子十五名）

○教材　『伊勢物語』二十二段分

一・二・四・五・十・十二・十三・十九・二十四・四十・四十五・五十八・六十・六十三・八十一・八十三・八十四・九十四・九十五・百一・百七・百二十三

（平成二十年度は九十段と九十五段も教材としている。）

(2)　単元の展開

二年生文系古典の単位数は三単位である。授業は、教科内で検討し作成した年間計画（シラバス）のもとに展開している。計画で示している教材は全講座共通して必ず扱う。担当クラスは発展講座なので、生徒が高度な読解力・表現力を有しており、『伊勢物語』学習を計画に加えてもこなしていけると判断した。原則週三単位のうち一単位を使っての実施であるが、シラバスとの関連で一単位の半分を使って実施したこともある。5／15に授業の後半で単元の説明をし、5／24、一時間とってワークシート作成作業を行った。続けて5／31、6／7、6／14、7／3、7／9（1／2）、7／12（1／2）、7／17（1／2）、8／23（1／2）、8／30（1／2）、9／6（1／2）、10／18、10／25（1／2）、11／1に実施した。計十一時間分の時間をかけたことになる。この期間に、平行して扱った教材は、『十訓抄』〈行成と実方〉、故事・寓話「蟷螂之斧」「病入膏肓」「蛇足」、『大和物語』〈姥捨〉、『枕草子』〈春はあけぼの・雪のいと高う降りたるを・かたはらいたきもの・村上の先帝の御時に〉、史話「嚢中之錐」「鼓腹撃壌」、『更級日記』〈源氏の五〇余巻〉である。いずれも『改訂版高等学校古典・古文編』（第一学習社）所収の教材である。

（3）生徒のワークシートの分析と課題

生徒たちはワークシート、「本文の展開」について、「登場人物の状況、行動」「登場人物の心情」「場面・事物」を簡潔な表現や図により、わかりやすくまとめていた。和歌の解釈、文法や修辞説明は古語辞典や文法書を活用し、整理していた者が多い。文法書は『読解を大切にする体系古典文法七訂版』（数研出版）、古語辞典は『全訳読解古語辞典第三版』（三省堂）を使用している。また『古典文学全集』の注釈も参考にしながら、これらを作成していた。

全体的にワークシートの完成度は高いものであり、特に本文の展開については図を有効に使ったり、簡潔に自分の言葉で整理したりして各段の展開の把握についてはほとんど間違いはなかった。ただ細かい解釈については不十分である部分や取り違えている箇所もあった。「全体を通したポイント・感想等」の欄に書かれてあった疑問点や感想には、各段内容の本質にかかわるようなものもあった。

次に挙げるのは各生徒が「全体を通したポイント・感想等」の欄に書いていたことである。平成二十年度はこの欄の記述がやや少なかったので、疑問点等も含めてしっかり記述するよう指示した。この欄の記述を中心に、生徒がどこに引っかかっていたか、どんなことを話し合ったか等、授業展開を思い起こしつつ課題を整理しようと思う。

○「全体を通したポイント・感想等」

（A～Vは生徒を1～123は段を示す。）

A 1	男は、美人姉妹のどちらに一目惚れしたのかなと思いました。現代語訳していくうちに一つ目の歌の元になった歌だということが分かりました。
B 2	男は女のことが好きではあるが、すでに通っている男がいたのでやむをえず、女の家を後にするが、未練の残っていることを表す歌。
C 4	好きな人に急に会えなくなった時の悲痛で孤独な気持ちがとてもよく表れている。月、春景色と筆者の気持ちを対照させることで一層悲しさが伝わってくると思った。
D 5	最初読んだときはよくわからない点がたくさんあったが、四段の内容を理解してから読んでみるとしっかりと内容をつかむことができた。この和歌は、男と女をつなぐ架け橋のような役割をしたものだと思った。女はなぜひそかな所に住むことになったのか分からなかった。
E 10	最初に和歌を読んだときには何を言いたいのかわからなかったが、掛詞や単語の意味を調べていくうちに、母の和歌の修辞法が優れていると感じた。高貴な家柄の人だったので教養のある人なのだろうと思った。ただ、結婚する娘本人の気持ちが直接描かれていないので娘の気持ちを知りたい。
F 12	古今和歌集から歌を借りて詠んでいたので女は学識があり、いい家の娘なのかと思った。
G 18	田舎の風流でない女性に興味がないだけのことはあって、からかいを上手くあしらってすばらしい歌を詠んだなあと思いました。
H 19	女は在原業平以外にも男がいて、在原業平はこのことに気付いていた。女の浮気が実は見透かされていたというお話。

I 24	和歌は必ず修辞が用いられていると思っていたが④のようなシンプルな和歌があることに驚いた。でも内容を理解しやすいので、テストに出るならこういう和歌がいいなとも思った。「三年行方不明なら他に嫁げる」といった現代にない慣習がみられるので違った世界観で古文を読むことが大切だと思った。
J 40	「絶え入りにけり」（意識不明になる）という表現に驚いた。少し大袈裟だけどそこにおもしろさがあると感じた。そのときの状況や人物の心情が細かく書いてあり読みやすかった。でも男は女にべた惚れだったが、女の気持ちはほとんど書いてないので、女も男と同じぐらい好きだったらいいなと思った。
K 45	外出するのさえ難しいむすめがどのようにして男を好きになったのか気になった。想いを寄せられていたとはいえ、何のつながりもないむすめのためにどうして男は喪に服したのだろうか。
L 58	幼なじみの女たちとふざけあっている様子。お互いにからかいあって「鬼」と呼んだりしているけれど、仲良くほほえましい様子。
M 60	男は自分が愛してあげられなかったから、妻が離れていったのに、妻の前で和歌を読んで、結局男は、妻に帰ってきてほしかったのかなあと思った。
N 63	在原業平は、女が来たことに気付いて、和歌①を詠んだのに女が出て行った様子を見て、どうして追いかけたのか、また女と同じようにのぞき見をしたのか、疑問に思った。また、「うばら、からたちにかかりて」というところで、どちらもとげが多い植物なので、女が和歌①をきいて、傷ついた心を表しているのかなと思った。この話の全体を通してみて、私は業平の優しさから、女がのぞき見をしたり、傷ついたり、マイナスの要因も引き起こしているので、この優しさが本当に有効だったのか、少し腑に落ちなかった。
O 81	この文を読んでいると、主人公の在原業平も出てこないし、伊勢物語の中でよくある恋愛の話でもなくて今までとはちょっと違う文だなと思いました。後半に六十以上ある国で塩竈と同じような土地はないという程のキレイで美しい塩竈という土地を一度見てみたいです。文自体はそんなに難しくなかったので読みやすかったです。
P 80	出家した理由は、一才の弟に帝位をとられたから、という説の方がよく言われているそうです。落ち込んで何も手につかない様子の親王を見てもなお仕えていたいと思える翁は、すごい人だと思いました。
Q 84	親子愛がすばらしいと思った。ただ、なぜ病気になっているわけでもないのに急ぎの用事として手紙を送ったのか疑問に思った。
R 94	現代でも十分共感できる内容だと思った。古文には様々な恋愛話があるが、今まで読んできた中で最も強烈な印象を受けた話であった。
S 96	せっかく想いをよせてくれた女の人を呪ったり、町の人からもよく思われていなかったところから男は相当性格悪かったんだなと思った。いつまでも結婚できないのはそのせいなんじゃないかと思った。女の人の方も、一度結婚すると伝えたのに裏切ったので、その時の気持ちが知りたい。読みはじめは、女の人が悪いなと思ったけど、調べていくとどっちもどっちなドロドロ恋愛だなって思いました。

T 101	U 107	V 123
業平は、歌の作り方を知らなかったのにすばらしい歌を詠んだのですごいと思った。	在原業平と女の人の恋の話ではなく、在原業平が人の恋を手助けしている話なので珍しいと思った。在原業平と藤原敏行が恋の手紙のやりとりをするということがおもしろいと思った。	男の里を去って別れたいという気持ちを、一歌だけで引き戻す歌の力はすごいと思った。

〈 分析と課題 〉

a　生徒の疑問について

現代の生徒の感覚からみてそぐわない事柄に関して、疑問が生じているようだ。そこに時代の違いや、時代を超える普遍的な感情などについて考えを深めるきっかけがあった。各段学習の中である程度は考えたが、全員の発表終了後、全体を整理して深める方法があった。また疑問や感想には諸説がからんでくるものや『伊勢物語』の本質、成立過程にかかわるものがあった。諸説やその根拠を紹介したり、「みやび」にかかわる事項などを再整理して考えさせることもできた。そのためには授業者の深い教材研究が必要である。

b　解釈のミスについて

助詞が正しく把握できていない、語り手と登場人物をを混同する、掛詞や比喩が使用されているわけではないのに使用されているものとして解釈する、などのミスが見られた。文法、和歌の修辞などの知識が中途半端であったり、学習による思いこみ、叙述に即して読めていないことから生じたミスだと考えられる。ミスを訂正するだけでなく、基本事項や古文を解釈する上でのポイントを確認させる授業展開も工夫すべきであった。

c　人物の心情について

『伊勢物語』には人物の心情が詳しく書かれていない箇所も多い。行動から心情を推測、想像し、それぞれの考えを出し合うことで、話し合いが活発になった。ただ、書かれていない心情を考える場合に、物語の方法や語りの特徴についても触れる必要があった。

(4) 本単元を可能にした高校一年次の学習

本学年は一年次に「芥川」と「筒井筒」を学習した。

「芥川」における文法学習は、過去・完了の助動詞の復習、解釈上重要な助動詞、助詞の学習を中心にしている。そして和歌の修辞法を学習させた。内容的には登場人物の状況、行動、心情の理解が中心である。

「筒井筒」では、助詞・助動詞に留意した口語訳を意識させた。本段は、登場人物の行動と心情に変化が見られ、歌によって相手に気持ちを伝えている。五首の歌における相手に伝えたい内容を二〇字程度でまとめる作業をさせ、また行動、心情の変化を図式的に整理させた。これらの作業は本単元につながるものであった。

6　おわりに―アクティブラーニング型授業を振り返って

○　個人によって差はあるものの、資料作成、発表、質疑を通して

達成感を味わせたり、次の学習への意欲を持たせることができる。

○　学習者基点の学びによって、教師基点の学びでは見えにくい課題が浮き彫りになる。

○　年間授業計画のどこでどのようにアクティブラーニング型授業を取り入れるかを練る必要がある。

○　生徒の主体性・能動性を重視した授業を実施するにしても、教師による綿密な準備・計画がなければうまく進まない。

○　教師主導型の授業において、各時間のどこかで能動性を促すことの積み重ねが必要である。

○　生徒の実態を把握した上で、アクティブラーニング型授業を構築しなければならない。

参考引用文献

『日本古典文学全集8』小学館　昭和47年

阿部俊子全訳注『伊勢物語』（上・下）講談社学術文庫　1979年

片桐洋一・後藤明生『伊勢物語・土佐日記』新潮社　1990年

俵万智『恋する伊勢物語』筑摩書房　1992年

高橋睦郎『すらすら読める伊勢物語』講談社　2004年

雨海博洋『文法全解伊勢物語』旺文社　1996年

上坂信男『伊勢物語評解』有精堂　昭和43年

『新・要説伊勢物語・更級日記』旺文社　平成10年

下崎邦明「広島県にける『学びの変革』に向けたチャレンジについて」教育課程企画特別部会資料　平成27年

中央審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」平成24年

松下佳代編著『ディープ・アクティブラーニング』勁草書房　2015年

溝上慎一『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂　2014年

竹村信治「伝統的な言語文化の掴み直し（上）」『国語教育研究』広島大学　2012年

竹村信治「伝統的な言語文化の掴み直し（下）」『論叢　国語教育学』広島大学　2012年

河地修『伊勢物語論集―成立論・作品論』竹林舎　2003年

神尾暢子『伊勢物語の成立と表現』新典社　平成15年

吉田達『伊勢物語・大和物語　その心とかたち』九州大学出版会　1988年

片桐洋一『伊勢物語全読解』和泉書院　2013年

〔追記〕

○　平成二十年度の実践については、同年度の、府中高等学校研究紀要、広島県国語教育研究会国語部会の紀要に報告している。

○　本稿をまとめるにあたって竹村信治先生から多くのご指導をいただいた。

（広島大学教育学研究科研究生）